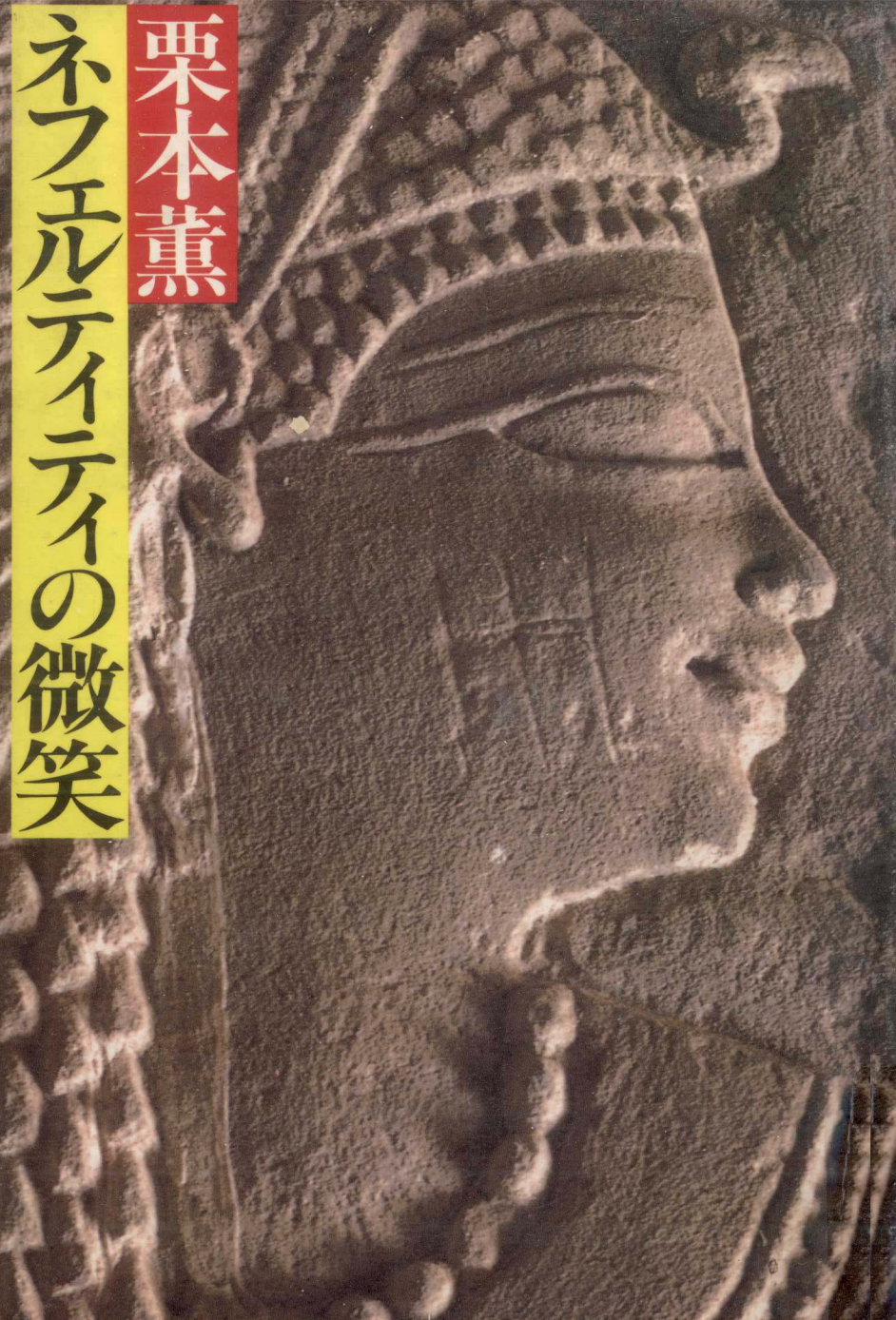
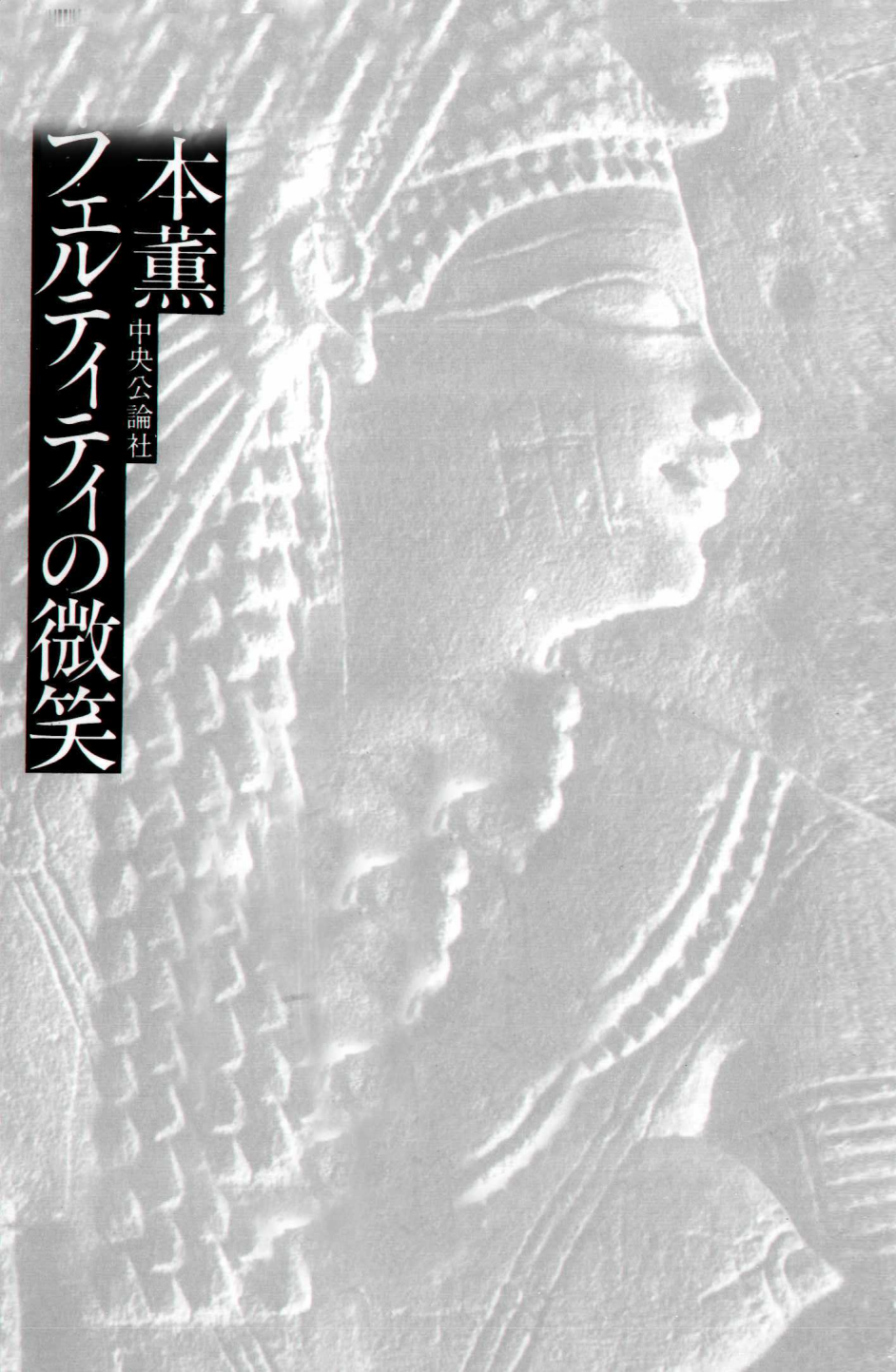


栗本薫

ネフエルティティの微笑





本薫

中央公論社

フェルティティの微笑

ネフエルティティの微笑

定価九八〇円

©一九八一

昭和五十六年十二月十日初版印刷
昭和五十六年十二月二十日初版発行

著者 栗本 薫

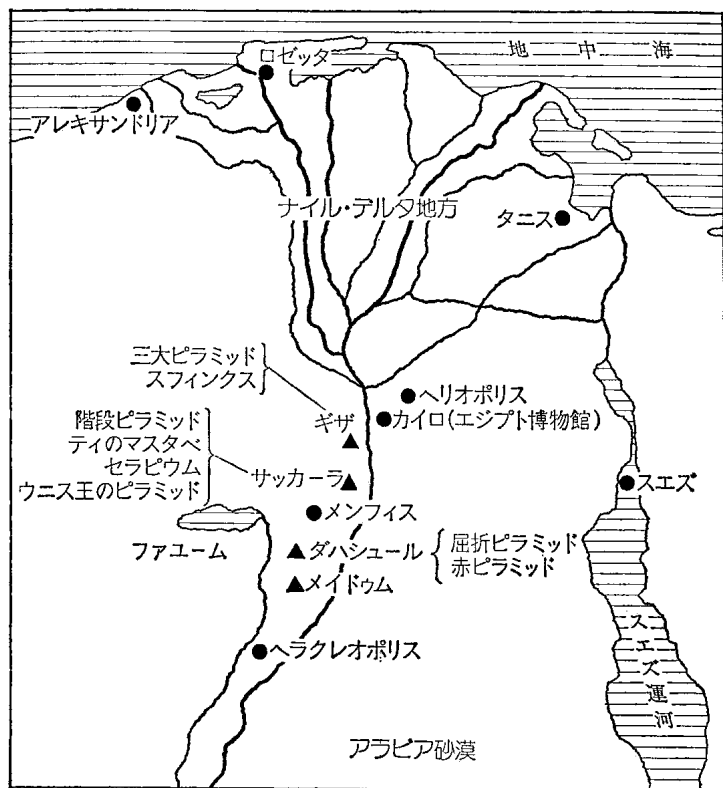
発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一八番七
振替 東京二三四
検印廃止

ネフェルティティの微笑



第一部

プロローグ

五月――

ぼくはまたカイロに来た。

来るつもりなどなかったのだ。そうだ、二年前のあのときと同じように……だが、まるで何かにひきよせられでもしたように、気がつくとき、暑いカイロに立っていて、そして――

いつにかわからぬやかましい自動車のクラクションと、人々の叫び声、そうして黄色い砂埃がぼくを包んでいた。ぼろ車の急ブレーキ、物売りの声、そしてバザールの喧騒。

これは夢のなかだろうか――そんな思いがぼくをとらえる。何ひとつかわっていない、などということがある、ありうるのだろうか。これほどぼくは――このぼくはかわってしまったというのに。

なにごともおこらなかつたというのだろうか——この白茶けた四角い町は？

道ばたで生のオレンジを絞ってくれるオレンジジュース屋から、ぼくはオレンジをひとつ買い、二十五ピアストルのコインを投げ出して、さっそくそれに歯をたてた。あたりはカーン・アル・カリリーリーのバザールの近く——

(アッラー。アッラー)

(アッラー。アッラー。アクバル)

ふいにぼくの耳に、市場の喧騒をつきやぶるようにして、あの日の巨大な叫び、ねり歩く人びと、そして太鼓とカスタネットとドラムの音がわきおこつた——が、はっとまわりを見まわすと、それは、いつのまにかすっかり馴染んでしまったバザール特有のうわーんというどよめきにすぎない。

「旦那。ドル買うよ」

「得だよ。八十ポンド」

「安い。安いよ」

ぼくは、袖をとらえんばかりに声をかける日に灼けた顔をぼんやりと見返す。見失ってしまったのだ。ぼくは、あの日、場所も同じこのカーン・アル・カリリーで、あの人を……

いまはもうここにいないはずもない、あれにまさる偶然が、ぼくをもういちど彼女の前に立たせてくれようわけもない——ぼくは、オレンジを手にしたまま、ぼんやりと歩き出した。

金もなく、地図を頼りに歩きまわった二年前のおかげで、まだどうやら地理は覚えてゐる。アズハル大学をぬけ、ラムセス通りにつきあたって、エジプト博物館へ——門前に並んでうるさく

呼びかけるタクシーの客引きを払いのけ、中へ入ってゆくと、ひんやりした空気がからだをつつんでくれる。いつかと同じ、巨大なラムセス二世、アメンヘテプの像――

だがぼくはお定まりのジェセル王にも書記像にも、ラーヘテプとネフェルトの夫婦の色あざやかな像にも目をくれない。うすぐらい、天井のたかい通路に並ぶたくさんのスフィンクスや石棺にも心もひかれず、ただまっすぐに、「アマルナの部屋」へ入る、「ネフェルティティの頭部」の前に立つ。

そう、これがはじまりだったのだ。ネフェルティティ、第十八王朝さいごの美女、若き革命王イクナートンの妻、「遠くから来た美しい人」……

とはいえその、頭のうしろがわはすでに失われ、デス・マスクのような石の、その顔がぼくにさほど美しく映じるといふわけではない。いちばん有名なのは、ベルリン博物館にあるネフェルティティ像だけれども、片目のないそれだって、頬骨がたかく、けわしく、口もとがおちくぼみ――美しくないとはいわないけれど、日本人の好みからはあまりにも男のようにけわしい線で彫られていすぎる。ベルリンの像もカイロのそれも、口もととはきつとひき結ばれ、笑うことすら知らぬようにみえる。

ぼくなら、同じ室にある小さな「王女の頭部」の方をずっと美人だと思うだろう。第一その方がずっと女らしい、やさしい顔立ちをしている。

そこまで考えてぼくは気づくのだ。あのときと同じだということに――あのときも、ぼくはそう考え、この昔の有名な女王にいささか失礼なことを、どうせ誰にも日本語がわかるものかとかをくくって声に出してつぶやき――

そのとき、うしろで、声がしたのである。

「ねえ——あなた、この人の一体何を知っているの？」

「え？」

「あんた——日本人ね」

それは空耳ではなかった。

夢でも記憶のいたずらでも心の迷いでもなく、たしかにいま、ぼくのうしろからそう呼びかける声が——あのときのように——

ぼくはふいに、カッとこみあげてくる、あつかたまりを感じ、がくがくと膝がふるえ出すのをぼんやりと意識した。

（まさか——）

（まさか、そんな……）

時をもしどせるならば、もういちどやり直せるものならば——ぼくは、がらんとした室の中で、息をつめ、ふるえながら、ゆっくりとふりむいた……

第一章

1

ぼく、こと森岡秋生——二年前には二十二歳で、ある私大の学生だった——それがどうしてカ

イロの街を、その夜とまるあてさえもなくひとりではつつき歩いていたか、それはいま思うならば、若気のいたりとしか、言いようのないことだった。

ほんとうはカイロでなくともよかったのだし、だからエジプトに興味があったわけでも、何かの予備知識があったわけでもさへなかった。もし事情がゆるせばぼくは南極へだって、火星へだって行っていただろう。だってぼくはそのとき、ぼくに行けるかぎりいちばん東京からおいところ——東京を思い出させるものが、何ひとつないところへ、やみくもに、ほんとうにやみくもに行ってしまったという、ただそれだけだったのだ。

二十二の世間知らずの大学生がそんなふうに考える理由などひとつしかない。お定まりの失恋——ぼくの場合は、まあ、ほんとうにありきたりなものよりは少しは手がこんだ失恋だったといえるだろうか。とはいえ失恋なんて、つまらぬありきたりのパターンばかりであるのにはちがいない。早い話がぼくは、ぼくの兄貴の嫁さん——兄嫁になるはずの人に恋してしまったのだった。だけど別にぼくのせいというわけじゃない。だってそのコはぼくの、大学の同級生でぼくのガールフレンドだとみんな思っていたし、ぼくの家へもたびたび遊びに来ていて——それがぼくではなく、ぼくの秀才の兄貴めあてだったなんて、うぬぼれのつよい二十二の男の子に、なかなかピンとくるわけではないのだ。

つまりぼくは、出来のよい兄貴にまんまと彼女の心をうばわれた、阿呆な弟というわけだった。まるっきり少女マンガみたいな話——でも、自分の身におこってみればけっこうしんどいもんさ——それに同級生なのだ。クラスメートから自分の家から、みんなにその事情が知れわたってしまつて、失恋のショックはまだがまんできても、同情やあわれみや好奇心や心づかいや、あらゆ

る目にとりかこまれている居心地のわるさほど耐えがたいものではなく……

で、結局ぼくが思いついたのは、親におどしまじりにせびった旅費で、やみくもに国外脱出をはかる、という、そのていどのことだったわけだ。

だからぼくはどこへだって行けたのだ。ただしアメリカとイギリスはいやだ——だって彼女は（ということはぼくもだが）英文学の学生で、いつも、夢はアメリカに留学することと、ビッグベンをきき、シンプソンのローストビーフをたべにロンドンにゆくことだと言っていた。

パリからウィーンめぐりもだめだ。それは彼女が兄貴にせがんでいるのをきいた、新婚旅行のコースだから——ハワイ香港じゃ近すぎる。中国は一人じゃ難しいし、寒いところへゆくのは、なんだかよけいにみじめな気持になりそうでいやだった。

そう——夏がいい。ぼくは秋に生まれついていたかもしれないが、こんなときには、冬の中でどんよりとうずくまるより、いっそじりじりとこげる太陽にやきつくされてしまったら、心の中のドロドロした水たまりも、蒸発してしまいかもしれない。それと砂漠だ。いつか名画リバイバルでみたマレーネ・ディートリッヒの、ハイヒールをぬぎすてて歩いていった白い足がふみしめていた砂漠のあつい、あつい砂。

そんなたわいもない子供じみた動機でぼくはカイロへやってきたのだった。ツアーにもぐりこみ、行ったらさいごそのままどこかへ消えてしまうつもりで——二十何時間の長い飛行のあいだ、ぼくはガイドブックひとつひろげず、まわりのツアーの女の子たちの興奮した話し声、王家の谷ツタンカーメン、ミイラ、カルナック、アブシンベル、などということばのとびかうひそひそ話を苛立たしくやりすごしていたものだ。

ツアーの五十人ばかりのメンバーは大半がOLか女子大生で、のこりはみな田舎の歯医者か農協さんの初老の夫婦、という感じだった。旅に出るとたいいてい人間は一時的に国粹主義者か、反対に同国人をむやみに恥じるエリートになる。

(下らない)

ぼくは後者のタイプであるらしかった。もっとも兄の婚約をきいてから、ぼくはことのほか女子大生にさげすみの目をそそぐ男の子になっていた。

(なにが、ツタンカーメンだ。——なんにも、知らないくせに)

それならおまえは何を知っているのかといわれれば、ただこの胸の奥の、綿をいっばいつめたような寂寥のほかには、それこそ彼女たち以上に何ひとつ知ってなどいなかったのだが。

それに、観光というはつきりした目的すらもっていないのだ。ぼくの方がきつと彼女たちよりもっと、金と時間のむだづかいをしているのだろう。だがぼくはいちばんそれをむだに使うために来たのだから——そんなことを、カイロ空港においてゆく飛行機の中で、ぼくはぼんやりと考えていた。

飛行機は早朝の五時にカイロ空港についた。そこでツアーの連中と別れてしまうと、もうぼくには、何もめあてがなかった。行く先をききたがる添乗員には、カイロにいる友人の日本人留学生の家にとまるからとうそをついた。

カイロはあついとところだとさんざんきかされていたのに、朝五時すぎの空港のまわりはまだうす暗く、空気はひんやりとしている。建物の外へ出ていってみると、まわりはあっけらかんとも何にもなくて、ただ、わけのわからないアラビア文字をのたくった看板だけがいくつも、砂漠の中

に立っている。

なんて、だだっ広くて何もなところだろう——ぼくは呆氣にとられながら思っていた。昨日までぼくのまわりにあった風景とは、それはあまりにも違っていた。

空港の建物のまわりには、何人もの、ひらひらするガラベアを着た男たちが所在なげにしゃがみこんでいる。なるほどここは異郷だった。さっきまで、ひどく大きな、とりかえしのつかぬことに思われていた千恵美のことが、にわかにな小さく、消えかけていってしまうほどに、ここは異郷だった。

あの男たちと並んで砂の上にこしかけていたらどうだろう——そんな氣持がさして来たが、ぼくはともかくも町なかへ行ってみようと思った。なけなしの金をエジプトの金にかえ、恐しく汚い紙幣をポケットにつめこんでタクシーに乗る。タクシーも、恐しく汚くてがたがたしている。

ともかくもやって来てしまったのだ——ぼくは思った。あとはどうにでもなるさ。ぼくはもう、こんなところまで来てしまったのだ。

むちゃくちゃな飛び出しはしたけれども、ほんとうはなににもかあてがないというわけでもなかった。来るとき、友人の友達だという留學生の住所と、友人からの一筆をもらってきけたのだ。佐伯慎三——よほどのことがなければ使うまいと思っていた切札だったのだが、空港にたったひとりでとりのこされ、どこにも行くあてがない、たったそれだけで、ぼくはもう、その住所を書いた紙を、タクシーの運転手に心弱くさしだしてしまっていた。

黒と白にぬりわけられたおんぼろなタクシー、リムジン・ミスルは、やたらとクラクションを鳴らしながら、泥色の家々の立ち並ぶカイロ市街に入りこみ、むやみにとび出してくるアラビア

服の通行人、黒いガラベレーヤの女たちをいまにもひき倒しそうにしながら、しだいにせせこましくたてこんだ通りへと入っていった。

何もかもが珍しかった。ぼくは明けてゆく街並を、タクシートのバックシートで、ただぼかんと口をあいて見とれていた。頭の上にカゴをのせて歩いてゆく、肥った黒衣の女たち、小さなロバにひかれた大八車、白茶けた歩道の上に、じかに戸板をしいた上につみあげて売っている、平たいパンみたいなもの。

映画の中にまちがって入りこんでしまった子どものように、ぼくはあっけにとられ、そしておちつかなかった。左側は、奇妙なめがね橋のような塀が延々とつづいている。家々は四角く、白茶けて、砂漠と同じ色をしている。

(へえ……！)

ぼくは、最初の一瞥でもうすっかり魅せられてしまっているが、それをあっさりと認めるのは少し口惜しいような、いまいましいような思いにとらわれて呟いていた。

(けっこう面白そうなところじゃん。——ほんとに、まるつきり、映画のセットだね)

ぼくのなかで、またたくまに、千恵美も、彼女がぼくの兄嫁になることも、どうでもよいことになりかけていたのだが、しかしそれでは、ぼくをこんなところへつれてきたぼくの憂愁に対して、あまりにもつれない仕打ちのような気がした。ぼくは失恋にしがみつки、どこへいったって同じことさ、などと呟きながら、きのうまでの鬱屈した思いをもちつづけていようとしたが、しかしぼくの目はもう、すっかり窓の外にくぎづけになっているのだった。

友達友達だという佐伯という留学生の家は、シタデルとかいう、ごみごみしたあたりにある

らしかった。いずれにせよ右も左もわかりはしないのだ。タクシーがとまり、ぼくはおろされ、運転手は何かアラビア語でごちゃごちゃやっていたが、ぼくがきょんとしていると、ひどくききとりにくい英語で何か言い、ぼくの手から、汚い、いくらの紙幣だかもよくわからない札を二枚とりあげて、片目をつぶるとどんどん行ってしまった。

ぼくはちょっと呆然としてあたりを見まわしていた。心細かった——まわりは、汚い、何となく貧しげな裏通りだった。通りすぎるアラビア人たちがぼくをじろじろ見ていった。道の両側にはびっしりと路上駐車車の車が並び、その下に、オレンジのひからびた皮や紙くずや、たくさんのゴミがころがっていた。片側に並んでいる建物は大きくて、少しはきれいだっただが、もう一方の側は、何だかひどくすすけて、その上にあちこちの窓から妙な赤い布や服や、ベッドカバーみたいなものがだらりとペロミたいに垂れ下がっていた。やせた黒いネコがニャーとなぎながらばかにしたように通りを横切っていた。カイロ空港の税関の中でも、何びきもの野良ネコを見かけたことをぼくは思い出した。エジプトはネコの多いところらしい。

路上駐車で幅が半分くらいになってしまった道を、ぼろぼろの——日本ならスクラップ場でしか見られないくらいいの、バンパーのひんまがったフィアットがクラクションを鳴らしづめに鳴らしながらかけぬけていった。それをやりすごしてから、ぼくは氣をとりなおし、どこかに住居標示はないかとキョロキョロしながら——どうせあったところで読めはしなかったろうが——そのへんをうろつきまわった。

ものの三十分も歩きまわり、通りかかった男に英語で住所を聞いた紙をみせたが読めぬと断られ、巡査らしいすごく体格のいいアラブ人がやって来たのでまた紙をみせたがてんで相手にされ

ず——まもなく、ぼくは、すっかりぐったりした気分で、そのゴミだらけの路上にしゃがみこんでいた。

ひどく自分がちっぽけで、ばかばかしくて——ひどく無力に思えてならなかった。あんなにイキがって、突っ張って、何か巨大なものに反抗し、背いてでもいるような気分でたかぶりのままに日本をとび出し——その実、ぼくはたったひとりの女の子の心がわりからほうほうのいで逃げ出してきた泣き虫にすぎなかったのだ。そしてまた、何か自分だけは、他の観光客とまったくちがうものにぶつかれるような氣負いを背負って、ツアーのスケジュールどおりホテルへバスで出かけていった連中を内心あざけりながらひとり歩きをして——そして、たちまち、いまやたったひとつの生命綱になってしまった、見知らぬ日本人ひとりの住所をさがしあぐね、まだようやく、カイロについて二、三時間だというのに、もうぐったりと絶望にかられて道の辺にしゃがみこんでいる。

（ガキだ。ぼくは、ただのびーびー泣くガキだ）

ぼくはうずくまり、ナツプザックの上にこしかけ、両手で顔をおおった。

そんなつもりはなかったのに、その敗北的な姿勢のまま、ぼくはずいぶん長いこと、ぼんやりしてしまったらしい。

小さく肩をつつかれて、びくっと我に返った。とびあがってふりむくと、小さな子がふたり、まん丸く目を見張ってぼくを眺めていた。

男の子と女の子だ。男の子は九つか十ぐらい、女の子はそれより三つ四つ下のようだ。二人とも、色あせた子供用のパジャマのようなものを着て、足ははだし、髪はくしゃくしゃで、砂埃で

白かった。顔ははつきりしたチョコレート色に、齒と目だけがあざやかに白い。

「なんだ」

ぼくはむっつりと言った。

「めずらしそうに見るな。ガキは、嫌いなんだ。あっちへ行けよ」

「……」

男の子が何か言った。女の子は、しっかりと男の子の青と白の縞のパジャマの裾をにぎりしめたまま、怖そうに目を見はっているばかりだ。

「何だよ」

ぼくは雨の中にすてられて道ゆく人に見むきもされなかった子ネコが、やっと近づいてくれた人も自分を助けてくれないと知って毛をさかだてて鳴きたてるように、とがった気分になっていた。

「じろじろ見るなってば。やるものなんかないぞ。バクシーシ！」

それはここに来るまえに、ツアーの添乗員からわたされた刷り物で覚えた、銭乞いのことばだった。エジプトの子供たち——時には大人も——は、そう言いながら手を出してむらがってくるが、やる必要は毛頭ない、とその刷り物には書いてあった。

女の子が丸い目をくるくるさせてキヤッキヤッと笑い出した。男の子は、びっくりしたようにぼくを見、少し考えていたが、

「ヤーバーニ？」

何回かくりかえしているので、やっとぼくにもわかった。